

アジアの独立

今回学ぶこと

アジアの多くの地域は、19世紀に入り欧米諸国の植民地支配を受けるようになったが、20世紀に入ると独立運動が盛んになり、支配を脱して独立を遂げていった。今回は、インドを主な対象にして、独立運動の出現、指導者ガンディーの運動方法、民族としての自覚と直面した問題、独立の結果、および、新たに独立した国々の指導者達が協力して平和を目指した動きについて学ぶ。

調べておこう・覚えておこう

- アジアの諸地域がヨーロッパ勢力の植民地支配に入っていく時期と状況、およびそれら地域での独立運動の指導者や運動方法、独立の時期について調べてみよう。
- インドで、19世紀末から独立までの間にどのような政治的動きがあったのかについて、主な動きを調べてみよう。
- アジアの国々が独立する際に、それぞれどのような形で領土が区切られていったのか調べてみよう。

エリートと民衆

植民地支配下に入ったインドでは、それまでの王権の統治組織・軍事組織や伝統的な宗教と結びついた形で社会的位置を獲得するエリートのあり方が大きく変わったことや、非農業部門の産業発展が限定され、経済的活動の中で地位を上げることが極めて難しかったことから、植民地統治システムが生み出した官吏や法曹関係などの領域にしかエリートとなろうとする者が進む道はなかった。他方、多くのインド人民衆は、厳しい貧困の下で日々の生活に追われていた。

19世紀にインド国民会議が創設されたが、その目的はイギリスとの融和的関係を維持することにあり、その構成もエリートが大半であった。国民会議は、ベンガル分割令などのイギリスの統治策に反発する中で、国民会議派として自治を目指す反英運動組織に変化していった。しかし、その運動はエリート内での運動に留まり、民衆との距離は極めて遠いままであった。

民族自決の原則を一つの結果としてもたらした第一次世界大戦に際して、イギリスはインドに自治を約束した。大戦では、多くのインド兵がヨーロッパやアフリカの戦線に送られ、多くの犠牲を生んだ。しかし、大戦終了後にイギリスは自治の約束をほごにし、逆に治安維持法を制定してインドの民族運動を弾圧した。その中で南アフリカから帰国したガンディーは、非暴力・不服従を唱えて運動を展開し、多くの民衆を民族運動の中に引き込み、エリートと民衆との距離を縮める役割を果たした。

民族の発見

植民地支配下では、インドはイギリスが直接統治する英領地域と間接的な支配を行使する500以上の藩王国から構成されていた。そのため、それらに住む民衆がインドを自らの国として必ずしも認識していたわけではなかった。一方、エリート層は極めて裕福な階層の出身であり、その多くはイギリスでの教育を受けて弁護士資格を得たような人々であった。そのため、自らを一般の民衆と同じ民族と意識することはほとんどなかった。しかし、民衆もエリートも、ガンディーが指導する反英運動に参加することによって、自らをインド民族として意識するように変化していった。

大戦のインパクト

第二次世界大戦が勃発すると、イギリスはインドを自動的に参戦させ、多くのインド兵が再び戦場に送られることになった。しかし、第一次大戦までとは異なり、こうした軍事費用はイギリスが負担することになっていたことから、大戦終了時にはイギリスはインドに対して大きな債務を負っていた。

大戦中に、イギリスへの戦争協力をめぐってインドの民族運動は分裂した。戦争協力を拒否した国民会議派の指導者たちは長期にわたって投獄され、他方、協力を約束したムスリム連盟は運動を続け、1940年にはムスリムとヒンドゥーは異なる民族であるという二民族論を打ち出し、別個の国家建設に向かうようになった。

大戦後、大きく疲弊し、またインドに対して財政的にも大きな債務を抱えていたイギリスは、インドでの高まる民族運動を抑えることがもはやできず、独立への動きが加速した。その際、少数派であるムスリムを代表するムスリム連盟は、二民族論に則って別個の国家建設を主張して国民会議派と激しく対立し、結局1947年にインドはインドとパキスタンの二つの国家に分離独立することになった。分離独立の際の激しい抗争もあって、両国は現在まで数度の戦争を繰り返してきており、現在も対立関係にあるままである。